

銀座アルプス

寺田寅彦

青空文庫

幼時の記憶の闇やみの中に、ところどころぼうつと明るく照らし出されて、たとえば映画の一断片のように、そこだけはきわめてはつきりしていながら、その前後が全く消えてしまった、そういう部分がいくつか保存されて残っている。そういう夢幻のような映像の中に現われた自分の幼時の姿を現実のこの自分と直接に結びつけて考えることは存外むづかしい。それは自分のようでもあり、そうでないようでもある。自分と密接な関係のあることは確かであるが、現在の自分とのつながりがすっかり闇の中に没している。その、絶えているかつながっているかわからないようにつながりを闇の中に探り出そうとするときに、われわれは平素頼みにして

いる自分の理性のたよりなさを感じる。そうして人間の意識的生活というものがほんとうに夢か幻のようなものであるように思われて来るのである。そういう記憶の断片がはたしてほんとうにあったことなのか、それとも、いつかずつと後年になってから見た一夜の夢の映像の記憶を過去に投影したものだか、記憶の現実性がきわめて頼み少ないものになって来るのである。

自分の幼時のそういう夢のような記憶の断片の中に、明治十八年ごろの東京の銀座ぎんざのある冬の夜の一角が映し出される。

その映画の断片によると、当時八歳の自分は両親に連れられて新富座しんとみざの芝居を見に行つたことになっている。それより前に、田舎いなかで母に連れられて何度か芝居を見たことはあつたようである

が、東京の芝居を見たのはおそらくその時がはじめてであつたら
 しい。どんな芝居であつたかほとんど記憶がないが、ただ「船ふなべ
 弁慶んけい」で知盛とももりの幽霊が登場し、それがきらきらする薙刀なぎなたを
 持つて、くるくる回りながら進んだり退いたりしたその凄惨せいさんに
 美しい姿だけが明瞭めいりょうに印象に残っている。それは、たしか先
 代の左団次さだんじであつたらしい。そうして相手の弁慶はおそらく団だんじ
 十郎じゅうろうではなかつたかと思われるが、不思議と弁慶の印象のほ
 うはきれいに消えてなくなつてしまつている。しかし時の敗者た
 る知盛の幽霊に対して、子供心にもひどく同情といふかなんとい
 うかわからない感情をいだいたものと見えて、そういう心持ちが
 今でもちやんと残留しているのである。

芝居茶屋というものの光景の記憶がかすかに残っている、それを考えると徳川時代の一角をのぞいて来たような幻覚が起こる。

芝居がはねて後に一同で銀座までぶらぶら歩いたものらしい。そうして当時の玉屋たまやの店へはいつて父が時計か何かをひやかしたと思われる。とにかくその時の玉屋の店の光景だけは実にはつきりした映像としていつでも眼前に呼び出すことができる。

夜ふけて人通りのまばらになった表の通りには木枯らしが吹いていた。黒光りのする店先の上がりがまち框かまちに腰を掛けた五十歳の父は、らっこ狨虎らっこの毛皮えりの襟えりのついたマントを着ていたようである。その頭の上には魚尾形ぎよびけいのガスの炎が深呼吸をしていた。じよさいのない中老店員の一人は、顧客の老軍人の秘蔵子らしいお坊っちゃん

自分の前に、当時としてはめつたに見られない舶来の珍しいおもちやを並べて見せた。その一つはねずみ色の天鷲絨びろうどで作った身長わずかに五六寸くらいの縫いぐるみの象であるが、それが横腹の所のネジをねじると、ジャージャーと歯車のすれ合う音を立てながら走りだす、そうしてあの長い鼻を巧みに屈伸して上げたり下げたりしながら勢いよく走るのである。もう一つは毛深い熊くまがあと足を前に投げ出してすわっている、それが首と前足を動かして滑稽こっけいな格好をして踊りだすと腹の中でオルゴールのかわいらしい音楽が聞こえて来るのである。

父がもしかしたら、どれか一つは買ってくれるかと思っていたが、ねだるのにはあまりに立派すぎる貴族的なおもちやなので遠

慮していたら、やはりとうとう買ってくれなかった。それから人
りんき
力にゆられて夜ふけの日比谷御門をぬけ、暗いさびしい寒い練
兵場わきの濠端ほりばたを抜けて中六番町なかくぼんちようの住み家へ帰って行つた。
その暗い丸の内の闇まるうちの中やみのところどころに高くそびえたアーク燈
が燦爛さんらんたる紫色の光を出してまたいたような気がする。
そのころすでにそんなものがあつたかどうか事實はわからないが、
自分の記憶の映画にはそういうことになっているのである。

この銀座ぎんざの冬の夜の記憶が、どういふものかひどく感傷的な色
彩を帯びて自分の生涯しょうがいにつきまとして来た。それにはおそら
く何か深い理由があるであろうが、それに関する手がかりは、自
分の意識の世界からはどうしても探り出すことができないのであ

る。その日の事を特に強い印象として焼き付けるだけの「光線」があつたであろう、その光線はとうの昔に消えて、一枚の印画だけが永久に残っているのである。人殺しをした瞬間に偶然机の上におかれてあつた紙片の上の文字が、殺人者の脳に焼き付いたよ
うな印象となつて残つたという話があるが、これに似た現象は存
外きわめて普通なことであるかもしれない。幼時の記憶の断片に
はたいてい何かしらそういう「光線」があつて、そのほうは当時
「意識」されなかつたために記憶から消えてしまふのではないか
と思われる。

晩年になつて母にたびたび聞かされたところによると、当時の
自分はひどく鉄道馬車に乗るのが好きで、時々書生や出入りのだ

れかれに連れられてはわざわざ乗りに行つたものだそうである。雨の降る日に二条の鉄路の中央のひどいぬかるみの流れを蹴^けたててペンキ塗りの箱車を引いて行く二頭のやせ馬のあわれな姿や、それが時々爆発的に糞^{ふん}をする様子などを思い出すことはできる。鉄路が悪かつたのか車台の安定が悪かつたのか、車は前後におじぎをするように揺れながら進行する。車掌が豆腐屋のような角^{つのぶ}笛^えを吹いていたように思うが、それはガタ馬車の記憶が混同しているのかもしれない。実際はベルであつたかもしれない。しかし角笛であつたような気がするというわけはこの馬車の記憶に結びついて離れることのできない妙な連想があるからである。それは、そのころどこかからもらった高価な舶来ビスケットの箱が錠

前付きのがんじょうなブリキ製であったが、その上面と四方の面
とに実に美しい油絵が描かれていた。その絵の一つが英国の田舎
の風景で、その中に乗客を満載した一台の郵便馬車メールコーチが進行してい
る。前世紀の中ごろあたりの西洋といえは想像されるような特別
な世界が、この方四五寸の彩色美しい絵の中に躍動しているの
ある。この小さな菓子箱のふたを通してのぞいた珍しい世界がど
んなに美しくなつかしいものであったか、ずっと晩年にほんとう
の西洋へ行って見ても、この「夢の西洋」はどこにもなかった。
この菓子箱のふたは自分の幼時の「緑の扉とびら」であったのである。
それはとにかく、この絵の中のロンドン、リーディング間の郵便
馬車の馬丁がシルクハットをかぶってそうしてやはり角笛を吹い

ている。そうして自分の「記憶」の夢の中では、この郵便馬車と、銀座ぎんざの鉄道馬車とがすっかり一つに溶け合ってしまったて、切つても切れない連想の糸でつながり合っているのである。

明治十九年にはもう東京を去つて遠い南海の田舎に移つた。そうして十年たった明治二十八年の夏に再び単身で上京して銀座尾張町わりちようの竹葉ちくようの隣のI家の二階に一月ばかりやつかいになつていた。当時父は日清戦役にっしんせんえきのために予備役で召集され、K留守師団に職を奉じながら麴町区こうじまちく平河町ひらかわちようのM旅館に泊まつたのである。

Iの家の二階や階下の便所の窓からは、幅三尺の路地を隔てた竹葉の料理場でうなぎを焼く団扇うちわの羽ばたきが見え、音が聞こえ、

においが嗅かがれた。 毘沙門びしゃもんかなんかの縁日にはI商店の格子戸こうしどの前に夜店が並んだ。 帳場で番頭や手代や、それからむすこのSちゃんといっしょに寄り集まっっているいろいろの遊戯や話をした。年の若い店員の間には文学熱が盛んで当時ほとんど唯一であったかと思われる青年文学雑誌「文庫」の作品の批評をしたりしたことであった。中でいちばん年とつた純下町型のYどんは時々露骨に性的な話題を持ち出して若い文学少年たちから憤慨排斥された。夜の三時ごろまでも表の人通りが絶えず、カンテラの油煙うづまが渦巻いていた。明け方近くなっても時々郵便局の馬車がけたたましい鈴の音を立てて三原橋みはらばしのあたりを通って行った。奥の間の主人主婦の世界は徳川時代とそんなに違わないように見えた。主婦は

江戸で生まれてほとんど東京を知らず、ただ音羽おとわの親類とお寺へ年に一度行くくらいのものであつた。ほとんどわが子のように自分をかわいがつてくれたが、話をする事がわからないので困つた。自分の世界の事を相手が全部知つてゐるという仮定を置いての話であるからわかりにくいのであつた。

むすこのSちゃんに連れられては京橋きょうばし近い東裏通りの寄席よせへ行つた。暑いころの昼席だと聴衆はほんの四五人ぐらいのこともあつた。くりくり坊主の桃川ももかわじよえん如燕にょえんが張り扇あふぎで元龜げんき天てん正しようの武將の勇姿をたたき出している間に、手ぬぐい浴衣ゆかたに三尺帯の遊び人が肱ひじまくら枕まくらで寝そべつて、小さな桶おけがた形の容器の中から鮎すしをつまんでいたりした。西裏通りへんの別の寄席よせへも行つた。伊い

藤痴遊とうちゆうであつたかと思う、若いのに漆黒の頬髯ほおひげをはやした新

講談師が、維新時代の実歴談を話して聞かせているうちに、偶然自分と同姓の人物の話が出て来た。Sが笑い出したら、講談師も気がついたか自分の顔ばかり見ながらにやにやして話をつづけた。

銀座ぎんざの西裏通りで、今のジャーマンベーカーの向かいあたりの銭湯へはいりに行っていた。今あるのと同じかどうかはわからな
い。芸者がよく出入りしていた。首だけまっ白に塗つてあごから上の顔面は黄色ないしは桃色にして、そうして両方のたぼを上向きにひつくらかえしているのが田舎少年いなかの目には不思議に思われた。それから、五丁目あたりの東側の水菓子屋で食わせるアイスクリームが当時の自分には異常に珍しくまたうまいものであつた。

ヴァニラの香味がなんとも知れず、見た事も聞いた事もない世界の果ての異国への憧憬どうけいをそそのるのであった。それを、リキュールの杯ぐらいな小さなガラス器に頭を丸く盛り上げたのが、中学生にとってはなかなか高価であつて、そうむやみには食われなかつた。それからまた、現在の二葉屋ふたばやのへんに「初音はつね」という小さな汁粉屋しるこやがあつて、その御膳汁粉ごぜんじるこが「十二か月」のより自分にはうまかつた。食うという事は知識欲とともに当時の最大の要事であつたのである。

父に連れられてはじめて西洋料理というものを食つたのが、今の「天金てんきん」の向かい側あたりの洋食店であつた。変な味にする奇妙な肉片を食わされたあとで、今のは牛の舌だと聞いて胸が悪

くなつて困つた。その時に、うまいと思つたのは、おしまいの菓子とコーヒーだけであつた。父に連れられて「松田^{まつだ}」で昼食を食つたのもそのころであつたように思う。玉子豆腐の朱わんのふたの裏に、すり生^{しょうが}姜がひとつまみくつつけてあつたことを、どういうわけか覚えてゐる。父が何かしらそれについて田舎と東京との料理の比較論といつたようなものをして聞かせたようであつた。

天狗煙草^{てんぐたばこ}が全盛の時代で、岩谷^{いわや}天狗の松^{まつ}平^{へい}氏が赤服で馬車を駆つてゐるのを見た記憶がある。店の紅殻^{べんがら}色の壁に天狗の面が暴^{ぼう}戻^{れい}な赤鼻を街上に突き出したところは、たしかに気の弱い文学少年を圧迫するものであつた。松平氏は資本家で搾取者であつたろうが、彼の闘志と赤色趣味とは今のプロレタリア運動にたず

さわる人々と共通なものをもっていた。しかしまたピンヘッドやサンライズを駆逐して国産を宣伝した点では一種のファシストでもあったのである。彼もたしかに時代の新人ではあった。

旧時代のハイカラ岸田きしだぎんこう吟香の洋品店へ、Sちゃんが象印の歯

みがきを買いに行ったら、どう聞き違えたものか、おかしなゴム製の袋を小僧がにやにやしなから持ち出したと言って、ひどくおかしがって話したことを思い出す。Sは口ごもって、ひどくはにかんだように物を言う癖があったのである。幼い岸田りゆうせい劉生氏があるいはそのころ店先をちよこちよこ歩いていたかもしれないという気がする。

しんばし新橋 詰めしんばしの勸工場がそのころもあつたらしい。これは言わば

細胞組織の百貨店であつて、後年のデパートメントストアの予
アンチ
シペーション
想 であり 胚エンブリオ芽ホウカのようなものであつたが、結局はやはり
小売り商の集団的蜂窩ほうかあるいは珊瑚礁さんごしょうのようなものであつたか
ら、今日のような対小売り商の問題は起こらなくても済んだであ
ろう。とにかく、これは、田舎者いなかもが国へのみやげ物を物色する
には最も便利な設備であつた。それから考えると、東京市民の全
部がことごとく「田舎者」になつた今日、デパートの繁盛するの
は当然であろう。ただ少数な江戸っ子の敗残者がわざわざ竹仙ちくせん
の染め物や伊勢由いせよしのはき物を求めることにはかない誇りを感じる
だけであろう。しかしデパートの品物に「こく」のある品のまれ
であることも事実である。

明治三十二年の夏、高等学校を卒業して大学にはいったのでちようど四年目に再び上京した。谷中の某寺やなかに下宿をきめるまでの数日を、やはり以前の尾張町おわりちようのI家でやつかいになった。谷中へ移つてからも土曜ごとにはほとんど欠かさず銀座ぎんざへ泊まりに行つた。当時、昔の鉄道馬車はもう電車になつていたような気がするが、「れんが」地域の雰囲気ふんいきは四年前とあまり変わりはなかつたようである。ただ中学生の自分が角帽をかぶり、少年のSちゃんちゃんが青年のS君になつていつのまにか酒をのむことを覚えていたくらいであつた。熊本くまもとで漱石先生に手引きしてもらつて以来俳句しきあんに凝つて、上京後はおりおり根岸ねぎしの子規庵しきあんをたずねたりしていたころであつたから、自然にI商店の帳場に新俳句の創作熱を鼓

吹したのかもしれない。当時いちばん若かったKちゃんが後年ひとかどの俳人になって、それが現に銀座裏河岸うらがしに異彩ある俳諧はいかいおでん屋を開いているのである。

なべちよう

ふうげつ

鍋町なべちようの風月ふうげつの二階に、すでにそのころから喫茶室きつさしつがあ

つて、片すみには古色蒼然そうぜんたるボコボコのピアノが一台すえてあつた。「ミルクのはいったおまんじゅう」をごちそうすると言つたS君が自分を連れて行つたのがこの喫茶室であつた。おまんじゅうはすなわちシュークリームであつたのである。シューというのはフランス語でキャベツのことだとS君が当時フランス語の独修をしていた自分に講釈をして聞かせた。

運命の神様はこの年から三十余年後の今日までずっと自分を東

京に定住させることにきめてしまった。明治四十二年から四年へかけて西洋へ行っている間だけがちよつと途切れてはいるが、心持ちの上では、この明治三十二年以後今日まではただひとつながりの期間としか思われない。従つて自分の東京と銀座に関する記憶は、——のような三つの部分から成り立っている。この最後の長線はどこまで続くか不明である。第一の短線と第二の短線との間が約十年でこの二つははっきり分かれている。第二短線と第三長線との間は四年しかないので、第三線の初めごろの事からがどうかすると第二線内の事からの中に紛れ込んで混同する恐れがある。第三線の長さは約三十年であるが、事からによつては三十年前がつい近ごろのように思われ、また事からによつては去年

震災以後の銀座には昔の「煉瓦^{れんが}」の面影はほとんどなくなつてしまつた。第二の故郷の一つであつたIの家はとうの昔に一家離散してしまつたが家だけは震災前までだいたい昔の姿で残つていたのに今ではそれすら影もなくなつてしまひ、昔帳場格子^{ちやうばごうし}からながめた向かいの下駄屋^{げたや}さんもどうなつたか、今三越^{みつこし}のすぐ隣にあるのがそれかどうか自分にはわからない。十二か月の汁粉屋^{しるこや}も裏通りへ引つ込んだようであつたがその後の消息を知らない。足もとの土でさえ、舗装の人造石やアスファルトの下に埋もれてしまつているのに、何をなつかしむともなく、尾張町^{おわりちやう}のあたりをさまよつては、昔の夢のありかを捜すような思いがするのである。

谷中の寺の下宿はこの上もなく暗く陰気な生活であつた。土曜

日に尾張町へ泊まりに行くとき明るくて暖かだにぎやか過ぎて神経

が疲れたが、谷中へ帰るとまた暗く、寒く、どうかすると寒の雨

降る夜中ごろにみかん箱のようなものに赤ん坊のなきがらを収め

たさびしいお弔いが来たりした。こういう墓穴のような世界で難

行苦行の六日を過ぎた後に出て見た尾張町の夜の灯は世にも

美しく見えないわけに行かなかつたであろう。今日いわゆるギン

ブラをする人々の心はさまざまであろうが、そういう人々の中の

多くの人の心持ちには、やはり三十年前の自分のそれに似たもの

があるかもしれない。みんな心の中に何かしらある名状し難い空

虚を感じている。銀座の舗道を歩いたらその空虚が満たされそう

な気がして出かける。ちよつとした買い物でもしたり、一杯の熱いコーヒーでも飲めば、一時だけでもそれが満たされたような気がする。しかしそんなことでなかなか満たされるはずの空虚ではないので、帰るが早いか、またすぐに光の町が恋しくなるであろう。いったいに心のさびしい暗い人間は、人を恐れながら人を恋しがり、光を恐れながら光を慕う虫に似ている。自分の知った範圍内でも、人からは仙せん人にんのように思われる学者で思いがけない銀座の散歩を楽しむ人が少なくないらしい。考えてみるとこのほうがあたりまえのような気がする。日常人事の交渉にくたび果てた人は、暇があつたら、むしろ一刻でも人じん裏かんを離れて、アルプスの尾根でも縦走するか、それとも山の湯に浸って少時の閑寂

を味わいたくなるのが自然であろう。心がにぎやかでいっぱい
充実している人には、せせこましくごみごみとした人いきれの銀
座を歩くほどばかりしくも不愉快なことはなく、広大な山川の風
景を前に腹いっぱい呼吸をして自由に手足を伸ばしたくなる
のがあたりまえである。F屋喫茶店きつさてんにいた文学青年給仕のM君
はよく、銀座なんか歩く人の気が知れないと言っていたが、考え
てみれば誠にもっとも至極なことである。

アルプスと言えは銀座ぎんざにもアルプスができた。デパートの階段
を頂上まで登るのはなかなかの労働である。そうして夏の暑い日
にその屋上へあがれば地上百尺、温度の一度や二度ぐらいは低い。
上には青空か白雲、時には飛行機が通る。駿河するがの富士や房総ぼうそうの

山も見える日がある。ついでに屋上さらに三四百尺の鉄塔を建てて頂上に展望台を作るといいと思う。その側面を広告塔にすれば気球広告よりも有効で、その料金を建設費はまもなく消却されるであろう。高い所に上がりたがるのは人間というものに本能的な欲望である。この欲望は赤ん坊の時からすでに現われる。自分が四歳の時に名古屋なごやにいたところのかすかな思い出の中には、どこか勝手口のような所にあつた高い板縁へよじ上ろうよじ上ろうとしてあせつたことが一つの重大な事項になっているのである。これに似た記憶は多くの人に共通なものである。この本能を守り立てればアルピニストになれる。エヴェレストの頂上をきわめようとして、それがために貴重な生命をおとしても悔やまないよう

になる。それで、事によるとデパートのはやる理由のことごとくが必ずしも便利重宝一点張りのものでもないかもしれない。そうでないとすると小売り商の作戦計画にはこの点を考慮に入れなければなるまい。

デパートアルプスには、階段を登るごとに美しい物と人との「お花畑」がある。勝手に取って持つて来るとは許されないが、見るだけでも目の保養にはなる。千円の晴れ着を横目ににらんで二十銭のくけひもを買えば、それでその高価な帯を買ったような不思議な幻覚を生ずる事も可能である。陳列されてある商品全部が自分のもので、宅^{うち}へ置ききれないからここへ倉敷料なしのただで預けてあると思えば、金持ち気分になりすますことも容易であ

る。入用なときはいつでも「預かり証」と引き換えに持つて帰ることができるのである。ただ問題は、肝心の時にその「預かり証」がなくなっていることである。

アルプスにも山火事があるように、デパートにも火事がある。山火事は谷から峰へと燃え上がるが、また上から下へも燃えて行く。しかし、デパートの火事は下へは燃えないで、上へばかり燃え抜けるから、逃げ道さえあいていれば下へ逃げればよい。下へ逃げそこなったら頂上の岩山の燃え草のない所へ行けば安全である。白木屋しろぎやの火事の時に、屋上が焼け落ちるかもしれないと言つておどかす途方もない与太郎があつたそうであるが、鉄筋コンクリートの岩山は火には決して焼けくずれない。しかも熱伝導がき

わめて悪いから下で半日焼けても屋上でははき物をはいた足の裏を焼けどする心配もない。窓からのぼる煙が渦巻いて来たら床の面へ顔をつければよいかと思われる。しかし、それも何千人と折り重なっては困るであろうし、また満員のデパートに急な火が起これば階段が人間ですし詰めになって閉塞へいそくしてしまう恐れがある。映画館の火事でそういう実例がたびたびあった。そういう時にいちばんだいたいなのは遭難者の訓練であるが、いちばんむつかしいのもまたその訓練である。

火事は物質の燃焼する現象であるからやはり一種の物理化学的現象である。この現象は日本には特別多い。それなのに日本の科学者で火事の研究をする人の少ないのは不思議である。西洋の大

学のどこにもまだ火災学という名前の講義をしている所がないからであるかもしれない。それはとにかく、よほど用心しないと、デパートというものは世にも巧妙な大量殺人機械になる恐れが充分にある。燃料を満載してある上に、しかも発火すると同時に出口が人間で閉塞し、その生きた栓が焼かれる仕掛けになっているからである。山火事の場合は居合わす人数の少ないだけに、損害は大概莫大ではあるが、金だけですむ。

デパートアルプスの頂上から見おろした銀座界隅の光景は、飛行機から見たニューヨーク、マンハッタンへんのようにはなはだしい凹凸がある。ただ違うのはこっちのいちばん高い家の高さがかの地のいちばん低い家の高さに相当する点であろう。この

ちぐはぐな凹凸は「近代的感覺」があつてパリの大通りのような
 單調な眠さが無い。うっかりすると目を突きそうである。また雑
 草の林立した廢園を思わせる。蟻ありのような人間、昆こんちゆう虫のよう
 な自動車が生命の営みにせわしそうである。

高い建ビルディング物の出現するのはなはだ突然である。打ち出の小こ
 槌づちかアラデインのランプの魔法の力で思いもよらぬ所にひよいひ
 よいと大きなビルディングが突然現われる。建物は実は長い間に
 きわめて緩徐に造り上げらるのであるが、その薄ぎたない見す
 ばらしい目隠しがある日に突然取り去られるからである。長い間
 人目につかない所でこつこつ勉強して力を養っていた人間がある
 日の運命のあけぼのに突然世間に顔を出すようなものである。

ネオンサインもあつちこつちとむやみにふえるが、このほうは建築とちがつて一夜にでもわずかな費用で取り付けられる。そのかわりにまたわずかに数分間でもはげしい降こうひよう電でんがあれば半分通りはみごとにたたきこわされるであろう。考えてみるとネオン燈がはやり始めて以来、まだ一度も著しい降電がなかつたようであるが、今に四五月ごろの雷雨性の不連続線に伴のうて鳩きゆうらん卵らん大だいの降電がほんのひとしきり襲つて来れば、銀座付近が一時はだいぶ暗くなる事であろう。その時が今からの確に予報できればどこかでネオンガスの買い占めが起こるかもしれない。しかし、降電がなくとも、狂風にあおられた街頭の雑品が飛んで来てぶつかれば結果は同様である。その時のために今から用心したいと思う

人は、簡単に金網で囲んでおけばいいと思うが、なんでもあすの用心をするとうことはおよそ近代的でないらしい。

暴風の跡の銀座ぎんざもきたないが、正月元がんとん旦の銀座もまた実に驚くべききたない見物みものである。昭和六年の元旦のちようど昼ごろに、麻布あざぶの親類から浅草あさくさの親類へ回る道順で銀座を通つて見たとき
の事である。荒涼、陰惨、デイスマル、トロストロース、あらゆる有り合わせの形容詞の総ざらえをしても間に合わない光景である。いつもは美しく飾り立てた小売り店の表には、実に見すばらしい明治時代の雨戸がしめてある。大商店のショウウインドウにははげさびた鎧戸よろいどか、よごれた日除幕ブラインドがおりている。死に物狂いの大晦日おおみそかの露店の引き上げた跡の街路には、紙くずやら藁わら

くずやら、あらゆるくずという限りのくず物がやけくそに一面に散らばって、それがおりからのからび切った木枯らしにほこり臭い渦うずを巻いては、ところどころの風陰に寄りかたまつて、ふるえおののきあえいでいるのである。言わば白粉おしろいははげ付け鬚まげはとれた世にもあさましい老女の化粧を白昼烈日のもとにさらしたよ
うなものであったのである。

これに反してまた、世にも美しいながめは雪の降る宵よいの銀座の灯ひの町である。あらゆる種類の電気照明は積雪飛雪の街頭にその最大能率を發揮する。ネオンサインの最も美しく見えるのもまた雪の夜である。雪の夜の銀座はいつもの人間臭いほこりっぽい現実性を失って、なんとなくおとぎ話を思わせるような幻想的な雰ふ

困ん氣いに包まれる。町の雑音までが常とは全くちがった音色を帯びて来る。シヨウウインドウの中の品々が信じ難いような色彩に輝いて見えるのである。そういうときに、清らかに明るい喫き茶つ店てんにはいつて、暖かいストーブのそばのマーブルのテーブルを前に腰かけてすすする熱いコーヒ―は、そういう夢幻的の空想を発酵させるに適したものである。

中学校で教わったナシヨナルリーダーの「マツチ売りの娘」の幻覚のように、大きなクリスマスストーリーが、神秘的に光り輝く霧の中に高く浮かみ上がる。あらゆる過去へのあこがれと、未来への希望とがその樅もみの小枝の節々につるされた色さまざまの飾り物の中からのぞいているのである。寺々の鐘が鳴り渡ると爆竹がと

どろいてプロージット、プロージットノイヤールという声々が空からも地からも沸き上がる。シャン／＼／＼と雪ぞりの鈴が聞こえ、村の楽隊のセレネードに二階の窓からグレーチヘンが顔を出す。たわいもない幻影を追う目がガラス柵だなのチョコレートに移ると、そこに昔の夢のビスケット箱の中のメールコーチが出現し、五十年前の父母の面影がちらつき、左団次の知とももり盛が髪を乱して舞台上に踊るのである。コーヒーの味のいちばんうまいのもまたそういうときである。

雪や寒い雨の日にコーヒーのうまいのはどういわけであるか
気象学者にも生理学者にもこれはわからない。空気が湿っていて
純粋な「渴かわき」を感じないために、余裕のできた舌の感覚が特別繊

細になつてゐるためかもしれないと思われる。

銀座^{ぎんざ}でコーヒーを飲ませる家は数え切れないほどたくさんあるが、家ごとにみんなコーヒーの味がちがう。そうして自分でほんとうにうまいと思うコーヒーを飲ましてくる家がきわめて少ない。日本の東京の銀座も案外不便なところだと思うことがある。日本でのんだいちばんうまいコーヒーはずっと以前にF画伯がそのきたない画室のすみの流しで、みずから湯を沸かしてこしらえてくれた一杯のそれであつた。

コーヒーに限らず、デパートの商品でも、あのようになくさんにあるものの中で自分の趣好に適合するものの少ないのに困ることがしばしばある。コーヒー茶わんとか灰皿^{はいざら}とかのこわれた代

わりを買いに行っても、近ごろのものには、大概たまらなくいやだと思ふような全く無益な装飾がしてあつてどうにも買う氣になれないのである。ネクタイがあまり古ぼけたので一つ奮発しようと思つて物色しても、あのたくさんな商品の中にこれをと手が出るのはまれである。これは自分の趣味嗜好しこうが時代に遅れたという事実を証明する以外になんらの意味もない些事さじではあろうが、この一些事はやはりちよつと自分にものを考えさせる。こういう時にわれわれがもしも、自分のいちばんいやなようないちばん新しい傾向の品を買つて来て我慢して使つてみると、おしまいには案外それが好きになるかもしれない。殺風景だと思つたいたコンクリートの倉庫も見慣れると賤しずが伏屋ふせやとはまたちがつた

詩趣や俳味も見いだされる。昭和模様のコーヒー茶わんでも慣れればおもしろくなるかもしれない。それがおもしろくなるまでの我慢がしきれないで、近ごろの若い者はを口癖にいうのは、ひつき畢ひつき竟ようもう先が短くなつた証拠かもしれない。もしも、これで百歳まで生きる覚悟があつたら、自分はやっぱり奮発していやな品に慣れる努力をするであろう。時代のアルプスを登るにはやはり骨が折れる。自分もせいぜい長生きする覚悟で若い者に負けないように銀座ぎんざアルプスの溪谷けいこくをよじ上ることにしたほうがよいかもしれない。そうして七十歳にでもなつたらアルプスの奥の武陵ぶりようの山奥に何々会館、サロン何とかいったような陽気な仙境せんきように桃源とうげんの春を探つて不老の靈泉をくむことにしよう。

八歳の時に始まった自分の「銀座の幻影」のフィルムははたしていつまで続くかこればかりはだれにもわからない。人は老ゆるが自然はよみがえる。一度影を隠した銀座の柳は、去年の夏ごろからまた街頭にたおやかな緑の糸をたれたが、昔の夢の鉄道馬車の代わりにことしは地下鉄道が開通して、銀座はますます立体的に生長することであろう。百歳まで生きなくとも銀座アルプスの頂上に飛行機の着発所のできるのは、そう遠いことでもないかもしれない。しかしもし自然の歴史が繰り返すとすれば二十世紀の終わりが二十一世紀の初めごろまでにはもう一度関東大地震が襲来するはずである。その時に銀座ぎんざの運命はどうなるか。その時の用心は今から心がけなければ間に合わない。困った事にはそのこ

ろの東京市民はもう大地震の事などはきれいに忘れてしまつて、大地震が来た時の災害を助長するようなあらゆる危険な施設を累積していることであろう。それを監督して非常に備えるのが地震国日本の為政者の重大な義務の一つでなければならぬ。それにもかかわらず今日の政治をあずかっている人たちで地震の事などを国の安危と結びつけて問題にする人はないようである。それで市民自身で今から充分の覚悟をきめなければせつかく築き上げた銀座アルプスもいつかは再び焦土と鉄筋の骸骨がいこつの砂漠さぼくになるかもしれない。それを予防する人柱の代わりに、今のうちに京橋と新橋との橋のたもとに一つずつ碑石を建てて、その表面に掘り埋めた銅版に「ちよつと待て、大地震の用意はいいか」という

意味のエピグラムを刻しておくといいかと思うが、その前を通る人が皆円タクに乗っているのではこれもやはりなんの役にも立ちそうもない。むしろ銀座アルプス連峰の頂上ごとにそういう碑銘を最も目につきやすいような形で備えたほうが有効であるかもしれない。人間と動物とのちがいはあすの事を考えるか考えないかというだけである。こういう世話をやくのもやはり大正十二年の震災災を体験して来た現在の市民の義務ではないかと思うのである。

(昭和八年二月、中央公論)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀座アルプス

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>